

平成25年度スーパーバイザー事業報告書

鳥取県における芸術活動を取り入れたコミュニケーション教育

鳥取県コミュニケーション教育研究会

鳥取県教育センター 研修企画課

1 はじめに

平成22年5月に文部科学省が設置した「コミュニケーション教育推進会議」では、『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～審議経過報告のとりまとめ』（平成23年8月29日）に報告されているように、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及のあり方について議論が進められてきた。平成24年度からは、「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」により、コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験の実践が進められている。

本研究は、以上の動向をふまえながら、鳥取県内の芸術表現を取り入れた教育実践に関する情報を収集し、コミュニケーション教育という視点で分析するとともに、各学校での継続的な授業実践に結びつける方策を見いだそうとするものである。

2 研究のねらい

- (1) 演劇等の芸術活動を取り入れたコミュニケーション教育手法の具体化
- (2) 鳥取県におけるコミュニケーション教育研究ネットワークづくり

3 研究方法

- (1) 県内の教育実践からテーマに即したものを収集し、分析を試みる。
- (2) 土曜自主セミナーを開催し、研究者、アーティスト、教育関係者等で意見交換をする。
- (3) 各学校での継続的な授業実践に結びつける方策を検討する。

4 研究内容

(1) 実践事例

- ① 「鳥の劇場」によるアウトリーチ活動【別添資料1】
鳥の劇場による協力のもと、演劇指導のサポートやワークショップ等の教育実践が行われた。

- ② 鳥取県立鳥取西高等学校 英語科

英語科「ライティング」の授業において、演劇を用いたスケッチプレイの実践が行われた。英語を用いた演劇づくりを通して、英語での言語表現活動による創作や身体表現を体感し、英語学習の意欲を高める取組が行われた。鳥の劇場の中島諒人さん、齊藤頼陽さん（県教育センタースーパーバイザー）による、演劇づくりの助言を受けて、創作の工夫に取り組むことができた。

(2) 土曜自主セミナー

平成26年2月15日（土）「未来の学びを創る～『コミュニケーション教育×学習科学』が生み出すイノベーション～」【別添資料2】

「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の実践を、「学習科学」によって読み解くことを通して、実際の授業場面でどのように取り組んでいくかを明確にするために開催した。

国立教育政策研究所の白水始総括研究官による講演、鳥取西高等学校の辻中孝彦教諭による実践報告、鳥の劇場の中島諒人さん、齊藤頼陽さん（県教育センタースーパーバイザー）による演劇ワークショップ、以上4名によるシンポジウムを開催した。

5 研究のまとめ

セミナーのシンポジウムでは、21世紀の学びを創造するための重要な視点が多く提示された。以下にまとめる成果と研究課題も含めて、今後の参考にしたい。

(1) 成果

芸術表現を取り入れたコミュニケーション教育の方法には、協調的な学びの要素が多く含まれている。創造性を育むこと自体も重要であるが、児童生徒が自ら課題を解決するための手段を得ることに役立つという点で、実践していくことに意味を感じている。

21世紀の学びで大切にしたいコミュニケーションの力は、「みんなで考えを持ち寄って、話し合いながら最初の考えをよりよくしていく」コミュニケーションである。例えば、演劇ワークショップでは、このようなコミュニケーションによって、コラボラティブな関係のなかで学びをつくっていくことができる。

(2) 今後の課題

学習科学の分野においても、演劇等のパフォーマンスの実践や評価は未開の分野である。今後は、授業実践の場面に、どのように設定していくかを具体化させることが課題である。

具体的には以下の提言を検討していきたい。

- ・演劇手法を用いた課題を、教科を越えた課題探求型の学習モデルとして考える。
- ・各教科で扱いやすい短編シナリオを選び、授業実践として使ってもらおう。
- ・以上の取り組みを授業の実績として、記録に残し、共有しあうネットワークを作る。

《参考》文部科学省 関連ページ

「コミュニケーション教育推進会議」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1294421.htm

「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/commu/1289958.htm

別添資料 1

平成25年度「鳥の劇場」アウトリーチ活動一覧

- 美哉幼稚園（境港市）：園児対象のワークショップ
- 鳥取市立福部すなっこ園：4歳児・5歳児対象のワークショップ
- 鳥取市立鹿野小学校：音読会への参加、学習発表会での上演にむけたサポートなど
- 鳥取市立逢坂小学校：全校表現「大堤物語」上演にむけたサポート
- 鳥取市立面影小学校：4年生対象のワークショップ
- 鳥取市立久松小学校：3年生親子会でのワークショップ
- 鳥取市立鹿野中学校：「総合的な学習の時間（演劇）」講師
- 鳥取県立鳥取緑風高等学校：学校設定科目「ドラマ」講師
- 鳥取県立青谷高等学校：「第52回 鳥取市民美術展」関連イベントとして、演劇部員・美術部員と舞台作品を制作、上演
- 岡山県立勝山高等学校：ビジネス科3年生対象のワークショップ
- 高知県高等学校演劇部 夏期舞台技術講習会および合同発表会：講師
- 鳥取県立皆生養護学校：小学部高学年から高等部の生徒を対象としたワークショップ、高等部「皆生・ブライト・フェスティバル」での舞台発表にむけたサポート
- 鳥取県立鳥取聾学校（中等部）：学校祭・鳥の演劇祭6での舞台発表にむけた上演のサポート
- 鳥取県立米子養護学校（高等部）：「けんべい祭」での舞台発表にむけた上演のサポート
- 美作大学短期大学部（岡山県津山市）：幼児教育学科、集中講義「総合表現技術」講師
- 鳥取県立皆生養護学校（職員）：自己表現力向上のためのワークショップ
- 鳥取県教育センター：「平成25年度 初任者研修・新規採用教員研修」講師
- 鳥取県立鹿野かちみ園・第二かちみ園：利用者対象のワークショップ
- じゆう劇場：「第3回鳥取県障がい者芸術文化祭」での発表・「第14回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会」での上演にむけたサポート
- 読み聞かせグループ「さくらんぼ」（鳥取市鹿野町）：鳥取市立幼児センターこじか園の園児や鹿野小学校での読み聞かせに参加

別添資料2

土曜自主セミナー

「未来の学びを創る～『コミュニケーション教育×学習科学』が生みだすイノベーション～」

実施報告

鳥取県教育センター 研修企画課

○期 日 平成26年2月15日(土)

○場 所 鳥取県教育センター 大研修室

○参加者 32名

○内 容

1. 基調講演「学習科学で読み解くコミュニケーション教育」国立教育政策研究所 総括研究官 白水 始

〔講演のポイント〕(研修企画課による記録から)

○コミュニケーション能力とは？

2つのきょうそう(「競争」と「共創」)を手がかりに、学習科学の分野で育てたいコミュニケーション教育について。

一部の優れた人を生み出すためのコミュニケーションではなく、みんなで考えを持ち寄って、話し合っ、話し合いながら最初の考えを超えるぐらい考えをよくする教育。

その繰り返しから、次のような力を獲得。

- 「私はこうしたい」が言える力
- 主張が通らなくても粘り強く話し合う力
- 「考えながら話してよい場」か、「一気に伝えきらなければいけない場」かを見極める力

コミュニケーションには、2つのタイプの説明がある。コミュニケーション教育や学習科学の学びでは、準備の中に学びがある。「考えながら話す」時間に知識変容の学びがある。

2つのモードを組み合わせて話すことができるようになることが、コミュニケーション能力の向上につながるのだろう。そのためには、まだあまり教育現場で意識されていない、子どもが「考えながら話す」＝「考えながら聞く」スキルを発揮できる場創りが必要。相手や他のチームの話をよく聞くために、ジグソー法や次に紹介する手法が有効。



2タイプの説明

- 知識伝達(Knowledge telling)
知っていることを伝えるために書く
- 知識変容(Knowledge transformation)
書くことによって、知識を作り変える
(Scardamalia & Bereiter, 1987)
- 最終稿的な発話(presentational talk)
- 探究型の発話(exploratory talk)
(Mercer, 1995)

16



(白水総括研究官の当日資料より)

(ブックサポートづくりの演習)

○Learning by Design (LBD) の方法によるブックサポートづくりの演習 (写真)

京大カード、輪ゴム、クリップを使って、7.5cm の高さの本立てをチームでつくる演習。チームの中に協調的な学びがあり、チーム間にも協調的な学びが仕込まれている。チームのアイデアに対しては、クレジット (著作権) を持たせるなど、アイデアを共有し合う関係のなかで、基準を共有していく。製作を繰り返すことで、学習者が評価の基準 (クライテリオン) を共有して学び合っていく文化がつけられる。

○まとめ

ブックサポートでは、基準を先に教えるのではなく、生徒相互の協調性の中で聞き合う基準がつくっていけることが大きな成果である。演劇の課題や問いがどのようなもので、演劇手法でいうブックサポート的な課題を考えていけるといい。物理の課題では、結果が収斂していくが、演劇の世界では創造が膨らんでいく点で、学習科学との相違があるので、違う発想が次々と生まれると面白い。

21 世紀型スキルの獲得等の新たな目標もあるなか、ローカルな教育現場で、目標を具体的に決めて、ネットワークで成果を共有していくことが大事で、そのための実践を積み上げていくプロジェクトもある。

コミュニケーションスキル等を育てるときに、「キレイに話して、他の人を説得して終わり」のようなコミュニケーションではなくて、「みんなで聞き合ってみんなのレベルを上げながら、少しずつ違うっていうのを認め合ってやっていく」教育、「それぞれの人に価値があることを受け止める」教育ができると思う。



2. 実践発表

(1) 「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の授業実践」 鳥取県立鳥取西高等学校 教諭 辻中孝彦

[発表資料より抜粋]

「ヒューマンな英語授業を目指して ～生徒の努力の報われる評価を目指して～」

定時制課程・専門学科の高校・普通科の高校校での 18 年間の実践から

- ① 「授業の力」
- ② Teaching より Coaching
- ③ Autonomous Learner 自立的学習者を育てる
Teacher-centered (教師主導) から Student-centered (生徒主導) へ
- ④ 実践事例
 - a. English Sketch Play Project 英語寸劇
 - b. English TV Commercial Project 英語寸劇

(2) 「芸術表現を通じたコミュニケーション教育の授業実践」鳥の劇場 俳優 齊藤 頼陽

学校等で実践している演劇ワークショップについて、ワークショップを体験させていただきながら実践発表していただいた。

- ① チームづくり 誕生月 好きな色
- ② 演劇ゲーム 大きな「リンゴ」(写真)
- ③ 演劇作り(状況設定、役、台本作り) UFO 課題



○まとめ

10分で作ったと思えないような出来映えだった。設定をもとにして、話が膨らんでいった点に可能性を感じている。国語以外に、他の教科に関係していくことで、学習効果を高めていくことができる。



3. シンポジウム「未来の学びを創る」

国立教育政策研究所 総括研究官 白水 始
 鳥の劇場 主宰 中島 諒人
 俳優 齊藤 頼陽
 鳥取県立鳥取西高等学校 教諭 辻中 孝彦



前半は、基調講演や実践発表のリフレクションとして、4名の講師からフォローのコメントをいただきました。後半は、「コミュニケーション教育」を切り口に、「どのように授業実践を進めるか」を中心に意見を交流し、未来の学びについて考えました。以下は、その中で今後の参考になる点を抽出したものです。

○演劇ワークショップ、演劇を活用した授業の有効性

演劇づくりのコラボラティブな過程のなかに、課題遂行者とモニター役が現れ、相互に入れ替わっていく課題解決のプロセスがある。協調的に学習する過程を学ぶことにもとても役立つ。その過程が、クリエイティビティが出てくる取組みになった。演劇のなかで、定型表現を使うことで、参加者が持っているスキーマと結びついて、生活表現とのつながりが見られた。演劇の持つ劇中役と実物の自分がもつ役割との二重性が面白く、演劇のフィクション性により、自分と照らし合わせて考える楽しみが出てくるので、高校生ぐらいからは、この楽しみを味わわせてあげたい。各教科など学習で取り組むなら、今回の題材に匹敵するものがあるといい。

演劇には、誰かが誰かに伝えようとする努力のプロセスがあり、「へー」ではなく「ふ〜ん」と言わせたいプロセスが演劇である。ブックサポートのプログラムや演劇ワークショップには、ブリコラージュ(器用仕事、レヴィ=ストロースの『野生の思考』を参照)によって、目の前の課題を手元のあれやこれやを使って、問題を解決していこうとする過程がある。今後、鳥取県というローカルな社会の目の前の状況や状態のなかで、課題をどう解決していくかという訓練の場が、演劇ワークショップである。演劇づくりを行うと、時間や空間を超えて、身体性が駆動され、人や社会の選択や言動を、自分のこととして考えられるようになる。辻中実践のなかの映像作品制作でも、身体性が駆動されることにより、学びが深まり、将来の身近な活用場面と結びつけて学ぶことができる。

○教育の地方自治をどう進めるか

学習指導要領や従来の授業の年間計画のフレームがあるなかで、教育の地方自治という発想によって、現場の先生が、目の前の子どもの可能性を伸ばすために、どう構想を進めていくか。卒業時につけたい力から逆算して、授業構想を立てていくことが大切だと思う。ペーパーテストとパフォーマンステストをうまく組み合わせる工夫も大切だ。

○トロント大学オンタリオ教育研究所の付属校の取組みから

Knowledge Forum では、前向きのアプローチに特色がある。きっかけとなる（足場掛けの）書き出しを使って、作文をしやすくし、児童自身に評価のアセスメントツールを共有して、評価と支援の一体化を進めている。指導要領のどこまで進んだかを、児童自身が確認できるようになるといい。一人ひとりの興味関心からはじまる多様な出発点は大切だが、子ども自身が良い課題を見つけるのは難しいので、大人が問いを見つけるのが大切な点だ。

○演劇と学習の共通する点

身体を使って学ぶことではじめて、分かることがある。演劇のなかには、身体、感情、表現に関わる教育があり、身体を使って苦勞などの感情が理解でき、見えてくる世界がある。このことを通して、生活のための学びが深まり、学問のための学びが生み出せると、有効な学びができる。

○グローバル人材の育成について

グローバル人材を育成する観点からも、演劇を通した教育は必要である。EU（ヨーロッパ連合）の意味や歴史の事柄も、劇を使って、人物になりきってやってみると、気持ちがわかり、追体験して学習できる。卒業後の生徒のなかにも、パフォーマンス授業が海外勤務に役立ったと実感している者もある。

○グローバルな英語とは？

アメリカ人の話す英語しか分からないのではなく、アジアの人々が使用している英語を学ばばいい。英米の人々が話す英語だけが英語ではなく、世界中の人々が話している英語が、グローバルな英語だと思う。

○自由な発想でつくる授業と、入試の学力が求められる授業は、アンビバレントな状況があるのでは？

入試を変えるしかない。東京大学では、高大接続の取組のなかで、高校生にジグソーで大学の教育内容の一部を一日で学ぶ場を、大学の先生が作りだせるかに挑む取り組みも始まっている。パフォーマンステストが増えるといいし、生活総合的な科目が出てきてもいい、そして、各学校でのパフォーマンスが記録として残って、入試点として算定されるシステムが作れると面白い。楽しい授業の体験は記憶が薄れないので、入試の学力も向上しているものと考えている。

○現場の創造的で多様な取組を阻害するものは何か。

現場の先生方が、目の前の児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばすために、やりたい内容や方法・アイデアを出して、実践してほしい。自由な実践を可能にするために、もっと勉強していきたいし、取り組めない理由があるとしたら、それは何か、情報を集めていきたい。



★参加者の感想より

- ・体験を含む内容で、頭のみならず、身体を使うことで分かることを体感できました。
- ・学習科学と芸術表現の関係性・重要性がよくわかりました。
- ・「共創」という概念をもって、授業に取り組んでいきたいと思いました。学校で生徒が集まって互いに考えを出し合うことの意義が感じられる授業作りを大切にしたい。
- ・お芝居をつくりながら、みんなの多様なアイデアで話がどんどん膨らんでいく過程が楽しかったし、場面設定、役、ストーリーについて考えが深まっていくのを実感しました。
- ・「共創」社会の考え方によって、学習の型やコミュニケーション能力の意味がよく整理された。
- ・何度も何度も話を聞きたいと思いました。また、チャンスがあれば DVD を見たいと思います。演劇をキーワードとして、学習科学とむすびつのが、とてもおもしろかった。演劇が教科として必要と考えています。
- ・期待以上の内容でした。参加者の方々も前向きで良かったです。LBD の体験は短時間で効果を伝えるのにすごく有効だと実感しました。
- ・学習科学という視点で今の自分の実践や活動を見つめ直すことができた。演劇という手法と授業のデザインについて、アイデアを得られた。
- ・学びや学習指導のあり方について「未来指向的」かつ「本質的」な論議がなされたのがよかった。
- ・競争ではなく共創の社会を創りたいと思います。どのようなコミュニケーション能力が必要なのか、はっきり分かりました。
- ・とても楽しくまた、アカデミックな気分にあふれました。ここでいう「コミュニケーション教育」の可能性や長所はとてもよくわかるのですが、ではなぜそれが一般的になっていないのか、という負の部分も併せて考えないと広がりがないように考えながら、参加していました。